

シナイの〈現在〉用法をめぐって

－ シテイナイとの比較から －

尾 崎 奈 津

1. はじめに

一般に、各文法カテゴリーにおいて否定は肯定と表裏をなすものと捉えられがちである。だが両者を比べてみると、そこには様々なずれが見られる。テンス・アスペクトに関しても同様で、シナイ・シテイナイとスル・シテイルを比較すると、否定形には肯定形にない用法が見られる。

この論文では否定独自の用法の一つである“現在”を表すシナイを取り上げ、シテイナイと比較しながら、その意味・特性を考えていきたい。以下、次のような順序で考察を進める。

- I. まずシナイとシテイナイの用法を簡単に整理し、この論文の考察の範囲を明らかにしておく。さらに否定形における問題点を整理しておく。
- II. シナイとシテイナイについての先行研究を概観しておく。
- III. “現在”を表すシナイの意味・特性をシテイナイとの比較から考えていく。さらに“現在”を表すシナイの文が、文の分類から見てどのような特徴を持つかを述べる。

2. 問題のありか

2.1 シナイとシテイナイの用法分類

考察に入る前に、動作・変化を表す動詞を対象にシナイ、シテイナイの用法を整理し、肯定の形式スル、シテイルにはみられない否定独自の用法を確認しておきたい。なお、() は各用法の例文である。また以下出典を記していないものはすべて作例である。

〈シナイ〉

- ①現在、事態が存在しないことを表す。(取引先の会社から返事が来ない。)
- ②未来において事態が存在しないことを表す。(明日はこの部屋はだれも使わない。)
- ③過去に事態が存在しなかったことを表す。(「昨日太郎君の家に行った?」「行かないよ」)
- ④習慣的な動作・動きがないことを表す。(あの人は朝はごはんを食べない。)
- ⑤特性を否定する。(油は水とは混ざらない。)
- ⑥意志 (僕は行かない。)
- ⑦命令 (そこ、カンニングしない!)

〈シテイナイ〉

- ①現在、動きが進行中であることを否定する。(今、だれもパソコンを使っていない。)
- ②現在、事態が存在しないことを表す。
 - A. いずれ事態が成立することを想定して述べる。【「まだ」等の共起が可能】((まだ) 太郎君は来ていない。)
 - A'. いずれ事態が成立することは想定せず、単に現在の状態だけを述べる。(この電話、別に壊れていないよ。)
 - B. 以前は成立していた事態が存在しない状態が一定期間続いていることを表す。(あれから太郎に会っていない。)
- ③未来の一点で動きが進行中であることを否定する。(明日の午後ならだれもパソコンを使っていないよ。)
- ④未来の一点において事態が存在しないことを表す。(明日8時だと、まだ店は開いていないな。)
- ⑤過去の一点において動きが進行中であったことを否定する。(「さっき、居眠りしてた?」「してないよ」)
- ⑥過去に事態が存在しなかったことを表す。(太郎は先週の水曜日は大学に来ていない。)^{注1}
- ⑦習慣的な動作・動きがないことを表す。(君、学校には行ってないの?)
- ⑧属性(「似合っていない」「足りていない」「劣っていない」など)^{注2}

上記の分類でシナイの①、シテイナイの②の“現在”とは、今現在問題とする事態がどこにも存在しないという意味である。なお、以下の考察ではこれら二つの用法の違いが問題となるが、今の段階では両者共“事態が存在しないことを表す”という同じ説明にとどめておく。また、シテイナイの⑥では事態そのものが存在しなかったのは「先週の水曜日」であるため、“過去”という表現にした。

さて、動作・変化を表す動詞の場合、肯定形のスルは一般的に“未来”を表す。したがってシナイの①は否定独自の用法といってよいだろう^{注3}。このほかにシナイの③とシテイナイの⑤も否定独自の用法とされるが、この論文では前者のシナイの①の用法を主な考察の対象とし、その意味・特性を考えてみる^{注4}。

2.2 “現在”を表すシナイに関する問題点

では、シナイが“現在”という用法を持つことにより、どのような問題が生じるのだろうか。上記の分類と重複する部分もあるが、シテイナイと比較しながらその点を改めて整理してみる。

動作・変化を表す動詞の場合、否定のシナイ—シテイナイと、肯定のスル—シテイルを比較すると意味の上で次のような違いがみられる。(2)は(1)を表にまとめたものである。また表のアルファベットはそれぞれ(1)の例文に対応する。

なお上記でも述べたように、2.1で示したシテイナイの用法の中で、“現在”を表すシナイと意味が類似し、その異同が問題となるのは②の用法である^{注5}。したがって、以下のシテイナイはすべて②の用法のものである。

- (1)a. 太郎は来るよ。(=来る予定) 【未来】
 b. 太郎は来ているよ。(=もうすでに来ている) 【現在】
 c. 太郎は来ないよ。(=来ない予定) 【未来】(用法②)
 d. 太郎、来ないね。(=(約束の時間になっているのに)来ない) 【現在】(用法①)
 e. 太郎は来ていないよ。 【現在】^{注6} (用法②)

(2)

肯定	[スル]	未来 (a)	[シテイル]	現在 (b)
否定	[シナイ]	未来 (c)	現在 (d)	[シテイナイ] 現在 (e)

(1)aが示すように、動作・変化を表す動詞の場合、肯定のスルは主に“未来”を表す。これに対して、スルと形態的に対応するシナイは、(1)c、dが示すように“未来”の他に“現在”も表すことができるのである。

我々がシナイという一つの形式でこの二つの意味を表し分けしているとすれば、またシナイの文を聞いた時にこの二つの意味をうまく解釈し分けしているとすれば、そこには様々な条件が働いていることが予測される。では、否定独自の用法である“現在”の意味はどのような条件の下に生じるのだろうか。言い換えれば、“現在”を表すシナイの文はどのような特性を持っているのだろうか。

さらにシナイが“現在”を表す結果、否定形ではシナイとシテイナイの二形式が“現在”を表すことになり、次のように両者の置き換えが可能な例も生じてくる。

- (3)a. 宗一郎「そういえばあれはどうなったんですか？」

碧「え？」

宗一郎「私は何者で、なんのために生まれてきたのか……でしたっけ」(中略)

碧「……あの答えはまだ見つからないわ」(BRAND)

- b. ……あの答えはまだ見つかっていないわ。

(3)では「見つからない」を「見つかっていない」に置き換えることができる。だが、両者がまったく同じ意味を表しているわけではない。では、シナイとシテイナイはどのように異なるのだろうか。

この論文で最も明らかにしたいのは第一点目の““現在”を表すシナイの特性”であるが、それには第二点目の““現在”を表すシナイとシテイナイの違い”を明らかにすることが問題解決の手がかりになると思われる。そこで、以下ではまず“現在”を表すシナイとシテイナイを比較検討し、そこから“現在”を表すシナイの特性を考えていく。

3. これまでの研究

ここでは高橋(1988)、工藤(1996)、日高(1995)から、シナイとシテイナイに関する記述をみる。

高橋(1988)は、肯定では完成相(=「運動をまるごとのすがたでさしだす」語形)のスルは現在を表すことができないのに、否定の完成相のシナイは現在を表すことができるという肯否の差異に注目し、その理由を次のように説明している。否定では、「運動がおりうると期待される時間はば」が運動の成立時間となる。そして「それが発話時までもちこされると、発話時よりまえから発話時のおわりまでが現在はばとなって、現在はばがのびる」。つまり否定の場合の「現在」は現実の時間の「現在」より長く捉えられるのである。このために、「まるごとのすがた」で存在しない運動もその中におさまることができるのである。またシテイナイについては「現在以前に運動の成立がないこと」を表す、としている。

工藤(1996)は、肯定発話では文の命題と現実とが直接的にむすびつくのに対して、否定発話では文の命題と現実とは、肯定的想定を〈媒介〉として〈間接的〉にむすびつくという考えに基づき、シナイは完成相の否定、一方のシテイナイは継続相・パーフェクト相の否定としている。そしてシナイが“現在”を表すのはi. 眼前描写、ii. 態度表明、感覚表出、iii. 事態成立への期待が強い場合(「なかなか、どうしても」などの共起が特徴)、iv. 「まだ」が共起する場合、v. 「しばらく、ずっと、4日間」などが共起する場合、としている。このうちi. とii. は肯定と共通のもので、否定独自のものはiii~vである。ただし、ivとvでは「まだ」「しばらく」などが共起するだけでは不十分で、〈現在〉であることを明確に示すコンテキストの支えが必要、としている。

日高(1995)は「マダ〜シナイ」と「マダ〜シテイナイ」の置き換えを検討し、両者が交替可能となるのは「発展→実現」の含意がある動詞の場合としている。具体例として「越える」「経つ」「過ぎる」「足りる」「話し手以外が移動主であり、話し手が到着点側に視点を置いている場合の「帰る」「来る」「(ある年齢・期間に)なる」などがあげられている。

さて、このようにシナイとシテイナイについては様々な検討がなされているが、以上の指摘を踏まえて、さらに次のような点が明らかにされなければならないだろう。まず、高橋(1988)では「現在はばがのびる」とされているが、これはどのようなことを意味するのか。そしてシナイでなぜ「現在はば」がのびるのか。また工藤(1996)ではいわばシナイは[[完成相(=スル)]_aの否定]_b、シテイナイは[[継続相・パーフェクト相(=シテイル)]_aの否定]_bというように、両者は否定の対象(=a)が異なることが指摘されている。では、そこからシナイ、シテイナイ全体(=b)を見た場合、両形式はどのような違いを見せるのだろうか。

さらに工藤(1996)で指摘されているように、シナイが“現在”を表すにはコンテキストが重要なポイントとなる。では、(1)dのように文脈としてのコンテキストがなく文自体が“現在”の解釈を支えるコンテキストを背景に持つものがあるとすれば、あるいは文自体が“現在”の解釈を引き起こすものがあるとすれば、それはどのようなタイプの文なのか。

以下では会話文を対象として、これらの点を検討していく。なお、例文で書き換えた部分はカタカナで表記し、正しくない文には*、文脈上不適切な文や元の文と意味が変わってしまう文には#を記す。また以下、“現在”を表すシナイ、“現在”を表すシテイナイは、必要な場合以外は“現在”を省略して、シナイ、シテイナイとする。

4. シナイとシテイナイの比較

4.1 発話のタイプ

シナイは常に“現在”を表すわけではない。それには一定の条件が必要である。これに対してシテイナイは文脈などの条件に左右されることなく常に“現在”を表すことができる。そこで、まずシテイナイの文をテストの軸とし、どのような発話の場合にシテイナイをシナイで置き換えられるのかを見てみることにする。“現在”を表すシナイとシテイナイが完全に重なるわけではないが、置き換えの可否を見れば“現在”を表すシナイの文の特性を大まかに掴むことができるだろう。

(4) もうそろそろ五月だけど、うちの桜、まだ |咲いていない/咲かない| の。

(5) 「明日京都に行ってくる」

「今行っても、まだ桜 |咲いていない/*咲かない| よ。」

(4)のシテイナイはシナイに置き換えることができる。一方、(5)ではシテイナイをシナイに置き換えることができない。「咲かない」にすると“現在”のことではなく“当分咲かない”という“未来”を表す文になってしまうだろう。では、(4)と(5)でなぜこのような違いが生じるのだろうか。

シナイで置き換えられるかどうかについて以上のような違いが生じるのは、(4)と(5)の発話のタイプの違いによるものと思われる。(4)は自分の家の桜を話題にした発話である。従って、話し手はその桜を直接観察して述べているはずである。一方、(5)は京都の桜を話題にした発話であり、話し手は桜を直接観察して述べているわけではない。その様子を推測し、「咲いていない」という判断を下して述べているのである。

このように(4)と(5)は、一方は直接観察、一方は推量・判断というように発話のタイプが異なっている。そして話し手が直接観察・確認したことを述べる時にはシテイナイの他にシナイも“現在”を表すことができるが、単に話し手の推量・判断を述べている時にはシナイは“現在”を表すことができないのではないだろうか。言い換えれば、シナイが“現在”を表すのは話し手が直接観察したことを述べる場合のみということになる¹⁷⁾。なお、視覚でとらえることが出来ない事態の場合は、話し手が自ら経験・確認したことを述べる場合ということになるだろう。

(6) “現在”の用法

	シナイ	シテイナイ
a) 話し手が自ら直接観察・確認したことを述べる発話	○	○
b) 話し手の推量・判断を表す発話	×	○

(4)と(5)のこのような発話のタイプの違いは、推量表現などを付加することによっても確かめられる。(4)は話し手が直接確認したことであるため、当然のことながら、“推量”を表す「だろう」や「多分／おそらく」などの表現、さらに話し手の判断を表す「と思う」という表現とはなじまない。これらの表現を付けると、例えば(4)の「咲いていない」は話し手が別の場所から家の桜のことを思い描いて述べるような文に、また「咲かない」は未来のことを述べる文に意味が変わってしまう。一方、(5)はこのような表現ともなじみ、付加しても意味は変わらない。

- (4)a. #もうそろそろ五月だけど、うちの桜、まだ {咲いていない／咲かない} だろう。
b. #もうそろそろ五月だけど、うちの桜、{多分／おそらく}まだ {咲いていない／咲かない}。
c. #もうそろそろ五月だけど、うちの桜、まだ {咲いていない／咲かない} と思うよ。
- (5)a. 「今行っても、まだ桜咲いていないだろう。」
b. 「今行っても、{多分／おそらく}まだ桜咲いていないよ。」
c. 「今行っても、まだ桜咲いていないと思うよ。」

実際に、集めた用例でもシテイナイの例では次の(7)(8)のように「だろう」や「と思う」が付いたものがみられたが、シナイの例では、4.3で述べるものを除いては1例もみられなかった^{註8}。そして“現在”を表すシナイの例に「だろう」や「と思う」を付けてみたところ、どれも(9)bのように“未来”の意味に変わってしまった。

- (7)カンナ：優美子、まだ帰ってないだろうな。なんてったって、久しぶりのデートだからなあ。
お茶でも飲んでいかないか。

一也：ああ、いや、今日はやめとくわ。(素顔)

- (8)「まったく、知らない間に、あんないい男、ゲットしちゃってさ」
「……ゲット……はまだしてないと思うな」瀬名が、さりげなく言った。(ロン)

- (9)a. 男2「どうやって開けんだ！」

男1「壊せ！」

(中略)

男2「壊れないよ！」(踊る)

b.壊れない {だろう／と思う}。

さらに、～シナイダロウの例文を集めてみたところ、“現在”を表すものはなく、すべて“未来”を表す文であった。

以上、シナイは話し手が直接観察・確認したことを表すのに対して、シテイナイはシナイと同様話し手が直接観察・確認したことを表す場合と、話し手の推量・判断を表す場合があることをみた。

4.2 話し手が観察する時点

4.1で話し手が直接観察・確認したことを表す発話ではシナイ、シテイナイの両方が使われること

をみた。ではその場合、両者にはどのような違いがあるのだろうか。以下ではこの点を検討する。

まず、シナイとシテイナイには時間を表す表現の共起において、次のような違いが見られる。

(10) {今のところ／現時点では} 来ていない。

(11) {今のところ／現時点では} 来ない。

(10)のシテイナイは“現在”の意味を表している。ところが(11)の「来ない」は“来ない予定”という“未来”の意味になってしまい、“現在”の意味には解釈しにくいだろう。つまり“現在”を表すシナイと「今のところ／現時点では」という現在の一点を表す表現とは相容れないのである。

これに対して、“現在”を表すシナイは次の「ずっと見てるんだけど」のような時間の流れを表す表現とは無理なく共起する。逆にシテイナイは共起しない。

(12) オープンの中をずっと見てるんだけど、シュークリームが{膨らまない／*膨らんでいない}。

このような違いはシナイとシテイナイの時間の捉え方の違いを示している。すなわちシナイは過去から現在までの時間の流れ全体を捉えて観察した表現であるため、「ずっと見てるんだけど」のような表現とは共起するが、「現時点では」のような現在の一点だけを捉えた表現とは矛盾を起こしてしまう。一方のシテイナイは現在の一点を捉えて観察した表現であるため、「現時点では」などとは無理なく共起するが、「ずっと見てるんだけど」のような表現とは共起しないのだろう。

次の“発見”を表す文からも、以上のようなシナイとシテイナイの違いが窺える。

(13) (シュークリームの焼き上がりを確認するためにオープンをのぞいて)

あっ、{*膨らまない／膨らんでいない}。

ここではシテイナイのみが可能で、シナイは使うことができない。(13)の「あっ」という表現は、目の前の事態に気付いたことを表す表現である。シテイナイが表すのは現在の一点のことであるため「あっ」という“発見”の表現となじむが、シナイが表すのは過去から現在までの時間全体のことであるため、このような表現とはなじまないのだろう。

ところで、工藤 (1996) で“現在”を表すシナイの特徴の一つとして「なかなか」の共起があげられていた。「なかなか」は「物事の解決や目標の達成を期待する暗示があり、それが簡単には実現しないことについての慨嘆の暗示がこもる」(『現代副詞用法辞典』p.383) 表現とされる。「まだ」もこれと類似した意味を持つ場合があるように思われるのだが、シナイ、シテイナイとの共起を見ると、両者には次のような違いが見られる。

(14) 電話がまだ {かかってこない／かかってきていない}。

(15) 電話がなかなか {かかってこない／*かかってきていない}。

「まだ」はシナイ、シテイナイの両方と共起する。これに対して、「なかなか」はシナイとは共起するがシテイナイとは共起しないのである。この現象も上記で述べたシナイ、シテイナイが表す時間の違いと平行的に説明できるのではないと思われる。

(10) (11)でシナイ、シテイナイと「今のところ／現時点では」との共起を見たが、ここでは「まだ」

「なかなか」と「今のところ／現時点では」との共起を試みる。

(16) 「電話は？」 「今のところ／現時点では、まだ／*なかなか」 だ

「まだ」は「今のところ／現時点では」と共起するが、「なかなか」はこれらの表現とは共起しない。この現象は次のように考えられる。「まだ」は話し手が現在の一点に視点を向け、事態の不成立を今現在のこととして捉えた表現であるため「今のところ／現時点では」と共起する。ところが「なかなか」は時間の推移に目を向け、「時間は流れているのに、それに伴って事態が進展しない、成立しない」という意味で事態の不成立を捉えた表現であるため、「今のところ／現時点では」とは相容れないのではないだろうか。

これをもとに(14)と(15)の違いを考えれば、「まだ」とシテイナイは共に現在の一点を捉える表現であるため、共起しても矛盾が起こらない。また「なかなか」とシナイは共に過去から現在までの時間の推移全体を捉えた表現であるため、共起しても矛盾が起こらない。ところが「なかなか」の捉える時間はシテイナイが捉える時間に収まりきらないため、矛盾がおこってしまい、共起できないのであろう。なお、過去から現在までの時間全体は現在の一点も含むため、シナイが「まだ」と共起しても矛盾は起こらない。

このような「まだ」と「なかなか」の共起の違いも、上記で述べたシナイ、シテイナイの捉える時間の違いの傍証になるものと思われる。

以上のように、シナイとシテイナイでは話し手の観察の対象となる時間がはっきりと異なり、それが使い分けの要因となる。ただし、シナイの捉える時間の流れにはシテイナイの“現在の一点”という時間も含まれる。そのため、時間の捉え方から言えばシナイを使うべき状況でシテイナイを使うことは可能である^{注9}。

(17) 「実は、先週来ているはずの書類がまだ |届かない／届いていない| んですが」

(17)では話し手は書類の到着をずっと待っていたことが予測される。すなわち現在までの時間の流れが確実に背景にある。このような場合、シナイを使えば話し手が書類が届かないことをずっと観察・確認していたというこれまでの経緯が伝わるだろう。一方“今現在書類がない”という現状だけを伝えればよいときには、これまでの観察、経緯は切り捨ててシテイナイを使う、というように両形式の使い分けができるのである。

逆に現在の一点の中に今までの時間の流れは収まりきらないため、シテイナイを使うべき状況でシナイを使うことはできない。次の(18)は、“直子が舟久保を訪ねて来て舟久保が隣の部屋に移ったことを知らずにもとの部屋をノックしている。それに気づいた近所の主婦が直子に声をかける”という状況での会話だが、話し手(主婦)は名札が出るかどうかをずっと観察していたとは考えられない。観察したのは発話時だけで、そこに至るまでの経緯は見えていない。そのためシテイナイが使われているのだろうが、ここではそれまでの時間の流れが背景にないため、シナイを使うことはできない。

(18) 主婦「舟久保さんなら、こっちへ越したんじゃないの」

直子「あ、こっち——」

主婦「まだ、名札 {出てない/#出ナイ} けど」(冬の)

以上ここでは、“現在”を表すシナイでは話し手は過去から現在までの時間の推移全体を捉え観察・確認しているのに対して、シテイナイでは現在の一点のみを観察・確認していることを述べた。

4.3 シテイナイとシナイの交替

4.3.1 シテイナイの代用としてのシナイ

上記でシナイとシテイナイの特徴について述べたが、ここで一見その反例に思われる例について述べておきたい。

4.1で“現在”を表すシナイは“推量”を表す「だろう」とは共起しないことをみた。ところが(19)の「咲かない」は“現在”を表しながら「だろう」と共起している。

(19)「もう京都の桜、咲いてるかな」

「まだ、咲かないだろう」

工藤(1996)では、シナイが“現在”のことを表すにはコンテキストの支えが重要であることが指摘されていた。(19)では「咲いているかな」という先行発話が現在のことを話題にしていることを明確に示している。このような先行発話があるために、ここではシナイを使うことができたのであろう。もし先行発話がなければ「咲かないだろう」は“未来”を表してしまい、“現在”を表すには「咲いていないだろう」としなければならない。したがって(19)のシナイはシテイナイの代用であり、4.1に対する反例とはならないだろう。

4.3.2 シテイナイとシナイが交替しやすい動詞

次の(20)もシナイが「だろう」と共起しており、一見4.1に対する反例のようにみえる。

(20)まだ1時間経たないだろう。

日高(1995)では「「発展→実現」の含意」がある動詞ではシナイとシテイナイが置き換え可能とされ、例として「経つ」「越える」「足りる」などの動詞が示されていた。結論を先に述べれば、本稿も「発展→実現」が含意される動詞ではシナイがシテイナイの替りをし得ると考える。ただし、その結論を述べるためには、どのような基準でシナイがシテイナイの替りとなっていると判断されるのが明確に示されなければならないだろう。さらに選り出した動詞でシナイとシテイナイが交替可能になるのはなぜなのか、その理由も検討する必要があるだろう。以下ではこのような点を本稿の枠組みから考えてみたい。

考察は以下の方法で行う。まず4.1、4.2でシテイナイのみが“現在”を表し、シナイでは“現在”を表せない例、またシナイでは非文となる例をみたが、その反例となるような動詞を集め、それらがある一定の特性を持つものとしてまとめられるかどうかをみしてみる。もし集めた動詞に共通性が見出

せれば、シナイとシテイナイが交替可能な動詞として一つのグループを認めてよいだろう。

反例となる動詞を選び出す方法は次の2つとする。

1. “発見”の「と」(「見てみると」「調べてみると」など)に続く～シテイナイを意味を変えることなく～シナイに置き換えることができるか。
2. 「シナイだろう」「シナイと思う」が“現在”を表し得るか。

1を反例を選び出す方法としたのは、次のような理由による。4.2でシテイナイは現在の一点を表す表現であるため“発見”の文に収まるが、シナイは過去から現在の時間全体のことを表す表現であるため“発見”の文には収まらないことをみた。同様の理由で“発見”を表す「と」はシテイナイとは共起するが、シナイとは本来共起しないはずなのである。したがって「～と、シテイナイ」を「～と、シナイ」に置き換えてみて文が成り立てばその動詞ではシナイがシテイナイの替りをし得るということになる。2については4.3.1で述べた通りである。検討した例をいくつか示す。

(21)a. 見てみると、咲いていない/*咲かない。

b. 調べてみると、参加者は100人に 達していない／達しない。

(22)a. 太郎君は 参加していない／#参加しない だろう。

b. 論文の枚数、数えていないけど、まだ50枚まで いっていない／いかない だろう。

(21)の「咲かない」は非文になってしまう。また(22)aの「参加しない」は“未来”のことを表し、もはや“現在”は表さなくなる。一方、「達しない」「いかない」などは“現在”を表している。

以上のようにして各動詞を検討した結果、一見反例と思われる文を作る動詞は次の(23)のような動詞であった。そしてこれらには「100人 に／を／まで」などの“到達点”が想定され、そこに“達する”ことを含意するという共通性があることがわかった。なお、どの動詞も「川を越える」のような“移動”を表すものではなく、「100人を越える」のように“変化”を表すものである。

(23) 達しない、(～まで) いかない、のぼらない、とどかない、ならない、越えない、経たない

したがって、上記のような一連の動詞ではシナイとシテイナイが交替しやすいと考えてよいと思うのだが、ではなぜこのような動詞では両者が交替しやすいのだろうか。その理由は今のところ明確にはわからないが、原因の一つとして次のようなことが考えられる。

2で示したシナイの分類の②Aと②A'を比べると、シナイと置き換えられる例はすべて②Aの事態の成立を想定して述べる用法に分類されるものであり、②A'の単に現状のみを述べるものは一例もなかった。このことからシテイナイがシナイの替わりとなるためには“事態の成立を想定していること”が必須の条件であると予測される。

さて動作・変化を表す動詞の場合、一概に否定といっても動作あるいは変化のどの段階を否定するのは各動詞によって異なる。これをシナイからみてみよう。例えば「買わない」は「買う」という動作“全体”を否定している。これに対して「動かない」は“動き始めない”という意味で、動作の“始発”を否定しているといえるだろう。さらに上記にあげた「(100人を) 越えない」などは、“最終的な

成立点である100人を越える”という動作・変化の“成立点への到達”を否定している。以上のように、シナイはi)動作・変化の“全体”を否定する場合、ii)“始発”を否定する場合、iii)“到達”を否定する場合の3種類があるように思われる。

このうち「買わない」「動かない」などの動詞では、いずれ事態が成立するのかどうか、あるいはいずれ事態が始まるのかどうかは含意されない。一方「越えない」「達しない」などiiiの動詞は、“到達点に至る前の段階にある”ことを意味することから、“到達点に達する”という事態成立の意味が動詞自体に焼き付いている。そのためシテイナイという形式でも“事態の成立を想定して述べる”という意味が必然的に生じ、シテイナイとシナイが交替しやすくなるのではないだろうか。

なお、日高(1995)であげられていた「足りない」他に「劣らない」「違わない」など“属性”を表す動詞もシナイとシテイナイが交替する。ただし、これはその動詞自体がテンス・アスペクトから解放されているためであり、(23)の動詞とは事情が異なるものと思われる。

以上、4.3では先行する文脈に依存した場合、“到達点”が想定され、そこに“達する”ことを含意する動詞の場合はシテイナイに替わってシナイが用いられることをみた。だが、これらはいくまでも文脈や動詞の性質によるもので、4.1、4.2で見た“現在”を表すシナイとは異なるものであろう。

さて、この章での考察から3で提示した問題に対する答えが得られるだろう。まず、シナイとシテイナイの形式そのものにはどのような違いがあるのか、シナイが“現在”を表す文とはどのようなタイプの文かという問題については、上記で述べた通りである。またシナイで「現在はばがのびる」のはなぜか、どのようにしてのびるのかという問題を提示した。本稿でもシナイの捉える時間は過去から現在までの時間全体であるという結論に達したが、考察の結果から考えれば「現在はばがのびる」のは単に話し手が頭の中で時間を拡大して考えることによるのではなく、話し手が実際に検証を繰り返していくことが「現在はばがのびる」ことにつながったのではないかと思われる。

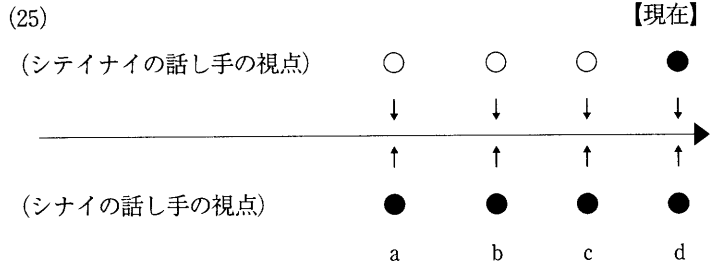
5. シナイの意味・特性

5.1 シナイ、シテイナイと証拠性

4.1と4.2でみたシナイとシテイナイの違いをここでもう一度まとめ、そこから両者の違いが何を意味するのか、また本稿の中心的な問題点であったシナイの特性とはどのようなものかを考えてみる。(25)は次の(24)の話し手の観察時点を図で示したものである。

(24)

	発話のタイプ	話し手の観察時点
シナイ	話し手の直接観察・確認	現在の一点だけでなく、現在に至るまでの時間の流れ、推移全体を捉える。
シテイナイ	(A) 話し手の直接観察・確認	現在の一点のみを捉える。
	(B) 話し手の推量・判断	



シナイは話し手が時間の推移と共に自らも視点を移動させて各々の時点を実タイムで捉え、各時点で事態が成立しないことを直接観察・確認して(図の●)述べる表現である¹⁰。一方シテイナイは(A)話し手が現在の一点に視点をあて、事態の成立が認められないことを直接観察・確認して述べる場合(この場合、話し手は現在以前のことは実際に見ていないこともあるし、あるいは見えても敢えて不要の情報として切り捨てる場合もある(図の○))と、(B)現在事態の成立が認められないことを話し手の推量・判断として述べる場合の2種類があった。

このうち直接観察・確認を表すシナイとシテイナイ(A)の違いは、発話が何に基づいているのかを示す、発話の証拠の違いとして捉えられるように思われる。すなわち、シナイは各時点で事態が成立するかどうかを直接観察・確認したということに基づき、結局事態の成立がどの時点にも認められないことを述べる表現であり、事態成立の“気配”がないことを述べる表現と言えるだろう。これに対してシテイナイは、現在の一点のみの観察・確認に基づき、現状において事態成立の“形跡”がないことを述べる表現である。このように、両者は発話の基となる証拠の種類が異なっている。

しばしば肯定は“図”に、否定は“地”に喩えられる。否定では事態は存在しないのだから、“地”つまり変化のない均質な状態・時間が続くことになる。その中で、シナイ、シテイナイという形式が使い分けられるとすれば、そこには話し手の視点と捉え方、つまり事態が存在しない、変化がないという状態を話し手がどの時点で確認しているのか、さらにどのように確認しているのかが強く関わってくるのではないだろうか。そしてその中でも“現在”を表すシナイは話し手の直接観察・確認の積み重ねというモーダルな要素が強く焼き付いた形式であるように思われる¹¹。

5.2 “現在”を表すシナイの文のタイプ

最後に、文の分類から見たシナイの文の位置づけについて述べておきたい。

“現在”を表すシナイの文は、常に話し手が直接観察・確認したことを述べる文であった。この特徴は現象文の特徴に似ており、また実際に両者には類似する点も認められる。ではその類似点とはどのようなものなのかを見てみよう。

まず第一に、推量を表す表現との関係があげられる。4.1で“現在”を表すシナイは推量を表す「だろう」などの表現と共起しないことを見た。「現象描写文」も同様に「推量系の判断のモダリティの存在・分化を持たない」(仁田(1991)p.35)文とされる。

さらに、「は」と「が」についてもシナイの文が現象文に類似することを示す現象が見られる。文脈を除いて考えた場合、シナイの文では主体が「が」で示されたものは“現在”に、「は」で示されたものは“未来”に解釈されやすい。なお、(27)が示すようにシテイナイではこのような違いは生じない。

(26) a. 問題が解決しない。 【現在】 (= 「(ずっと努力しているのだが、まだ) 解決しない」)

b. 問題は解決しない。 【未来】 (= 「(これから先当分) 解決しない」)

(27) a. 問題が解決していない。 【現在】

b. 問題は解決していない。 【現在】

これは、“現在”を表すシナイの文は現象文的、“未来”を表すシナイの文は判断文と、両者の文のタイプが異なることによるものと思われる。つまり主体が「が」で示された場合は“話し手の直接観察”すなわち“現在”の意味に解釈が傾き、「は」で示された場合には“話し手の推量・判断”すなわち“未来”の意味に解釈が傾くのではないだろうか。

(28) 【現在】 【未来】

シナイ 話し手が直接観察したことを表す発話 ↔ 話し手の推量・判断を表す発話

(現象文に類似)

(判断文)

ただし、“現在”を表すシナイの文がすべて「が」の文というわけではない。「は」が現れる文もある。そもそも否定文は通常それに対応する肯定の事態を前提として発せられるものであり、典型的な現象文にはなりにくい。またシナイの文自体、話し手が各時点での確認を積み重ねそれを記憶した上で述べる文であり、決して純粋な現象文ではない。そのため典型的な現象文とは異り、「は」の文と「が」の文が混在するのだろう。

だが、一般に判断文とされる否定文の中で、“現在”を表すシナイの文は現象文に近い位置を占める文であるということはいえるのではないだろうか。

6. おわりに

この論文では、“現在”を表すシナイとシテイナイを比較し、両者は“話し手の直接観察・確認”か“話し手の推量・判断”かという発話のタイプ、及び“各時点における観察・確認の積み重ね”か“現在の一点での観察・確認”かという発話の証拠において異なることを明らかにした。そして“現在”を表すシナイは“直接観察・確認の積み重ね”という話し手の視点と事態の捉え方が強く焼き付いた形式であり、現象文に近い性質を持っていることを述べた。

以上、会話の文を対象にして“現在”を表すシナイとシテイナイを見てきたが、次に地の文において両者がどのような特徴を示すかを検討する必要があるだろう。またシテイナイに関しては、会話の文においてもまだまだ検討すべき点が多く残されている。これらは今後の課題としたい。

《注》

- 注1. シテイルの用法で、従来「経験」や「記録」とされてきたものは、“今までに一度も”という意味であれば②に、“先月の3日には”のように過去の一点に限定されていれば⑥になると思われる。
- 注2. “属性”を表す用法は、テンス・アスペクトから完全に解放されたものである。
- 注3. 状態を表す動詞の場合はスル、シナイ共に現在を表すため、肯定と否定の間でのずれは生じない。そのため本稿では考察の対象を動作・変化を表す動詞とした。
- 注4. シナイの③とシテイナイの⑤についてはいくつかの先行研究で考察がなされている。これらは各々シナカッタ、シテイナカッタの替りとして使われたものであり、「太郎君の家に行った」「居眠りしてた」という肯定的な想定が先行発話に明示されていることがその成立条件とされている。
- 注5. ②の中で、シナイと置き換えが可能な例が見られるのは、AとBのみである。特にこの論文の議論では、Aの用法を考察の中心とする。
- 注6. シテイナイは“未来において事態が存在しないこと”（用法の④）を表すことも可能と思われる。だが、集めた用例を見たところ、そのような例はわずか1例のみであった。シテイナイは理論的には“未来”を表せるが、実際の使用ではほぼ“現在”に限定されているようである。なお、肯定のシテイルは“未来”も表すが、ここでの議論には関わらないため表には“現在”のみを記した。
- 注7. 伝聞などの場合は、“話し手”ではなく、“話し手”に情報を伝えた人の直接観察かどうか問題となる。
- 注8. ここで問題とする「だろう」はあくまで“推量”の「だろう」であり、“確認要求”の「だろう」ではない。“確認要求”の「だろう」は次のように“現在”を表すシナイとも共起する。
- 例) (電話で)「この間あげた桜、まだ咲かないでしょう」
- ここでは話し手は、聞き手が持っている情報について確認を求めているのであり、推量を行っているわけではない。そして他の質問文と同様、聞き手が直接観察・確認したこととして答えることができる内容であれば、“直接観察・確認したことを述べる発話”としてシナイが“現在”を表すことができる。
- 注9. なお、シナイとシテイナイの置き換えには主体の意志性も関係する。すなわちシナイでは“事態の選択”という主体の意志が前面に出やすく、それが置き換えの可否の要因となる場合がある。否定と意志の関係については、稿を改めて述べたい。
- 注10. “現在”を表すシナイではa～cでの観察が重要になる。この間の観察があれば、発話時(d)の観察は無理になくてもよい。逆にa～cまでの観察がなく、dの観察のみの場合は、より「現象文」に近い「眼前描写」の文となる。
- 注11. “現在”を表すシナイは「手紙はもう来たけれど、荷物はまだ来ない」のように、意味の上ではシタに対応するようと思われる。ただし、この点に関してはまだまだ詳しい検討が必要であり、今後の課題である。

《用例の出典》

北川悦吏子『ロングバケーション』角川文庫、向田邦子『冬の運動会』大和書房、「踊る大捜査線」『ドラマ シナリオ・マガジン』No.223映人社、「BRAND」『ドラマ シナリオ・マガジン』No.249映人社、テレビドラマ『素顔のままで』（フジテレビ）

《参考文献》

- 赤峯裕子 1989 「「まだ～ない」から「まだ～ていない」へ」『奥村三雄教授退官記念 国語学論叢』桜楓社
- 工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4 武蔵大学
- 1989 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことばの科学』3 むぎ書房
- 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間と表現—』ひつじ書房
- 1996 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学』7 むぎ書房
- 小泉保他編 1989 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 小矢野哲夫 1977 「動詞「走る」を中心とする述語のアスペクトとテンス—アスペクト・テンス考察の一視点—」『国語学研究』17 東北大学
- 1978 「打消助動詞「ない」の一特性—アスペクトを表す場合—」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学研究留学生別科
- 佐治圭三 1991 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 鈴木泰 1996 「メノマエ性と視点(Ⅲ)—古代日本語の通達動詞の evidentiality (証拠性)—」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』ひつじ書房
- 2000 「メノマエ性」『日本語学 四月臨時増刊号』第十九巻第5号 明治書院
- 高橋太郎 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 1988 「うちけしのテンスについて」『麗澤大学紀要』47
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 飛田良文、浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 日高水穂 1995 「「マダ～シナイ」と「マダ～シナイナイ—未実現相の否定表現—」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 宮崎和人 1996 「確認要求表現と談話構造—「～ダロウ」と「～ジャナイカ」の比較—」『岡山大学文学部紀要』25
- Givón, T. 1978 "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology" in Cole, P., ed., *Syntax and Semantics*. 9 Academic Press

<付記>

この論文は2000年3月4日に香川大学で開かれた平成11年度第10回日本語教育学会研究集会において、「動詞と否定」という題目で発表したものをもとにまとめなおしたものである。発表に際しては山内博之先生を始め、皆様から重要なコメントをいただきました。そして本稿をまとめるにあたっては、辻星児先生、江口泰生先生から貴重なご意見、ご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。また宮崎和人先生には数多くのご教示をいただきました。記して深く感謝いたします。